

### 第3章 集団内における経験と統一見解の形成

## 1. はじめに

妖術研究において重要視される「災因論」とは、「人間にふりかかる不幸や災いを解釈し、説明し、そしてそれに対処するための行動を指示する、個人に外在するシステム」[長島 1982:539]とされる。たしかに妖術の観念は、表層的な因果関係だけでは理解できない位相をふくんでいる。それは、「特定の人物が」、「特定のときに」、なぜ不幸に遭遇せねばならなかったのかという、個別性に関連する点である。

この個別性に対する指摘は、エヴァンズ=プリチャードの思考様式論からはじまっているが、その後の人類学においては、妖術というイディオムから社会関係や特性パターンを抽出することに腐心するあまり、エヴァンズ=プリチャードが把握しようとした「特定の」という位相、つまり他者によって代替できない不幸や病の経験において顕在化する「個」のトposへの直感が看過されてしまった[菊地 2001:70-72]。そのため、妖術研究は、社会的な葛藤劇を引き起こす過程を記述する研究へと引き継がれていった[たとえば小田 1986]。

ところが近年、社会的葛藤ばかりに焦点を当てる災因論研究は、災厄についての人々の経験がどのように組織されているかという問題において不備があることが指摘されている。浜本は、「種々の宗教的諸観念が指しているものを、不幸や災いに対する『原因』の一言で片づけてしまったところに、これらの宗教的観念が人々の経験をどのようなものとして組織しているかという問題に対する人類学者の接近を阻む最大の障壁があったのだ」とし、災因論にひそむ問題点を明らかにした[浜本 1989:57-58]。浜本は、妖術などの災厄の語りとは、「原因」というよりもむしろ、ことの成りゆきが示す「表情」や物語性、あるいはそこに含まれる関係性についての語りであることを強調した。つまり、この語りは、事のなりゆきについてのメタ・陳述なのである[ibid]。浜本の考察は、災因論研究のなかに経験を組織する視点を組み入れることになったのである。本章の考察はこの研究の延長線上にあり、災厄の経験のなかに内包される関係性がどのように人々に影響し、彼らの語りを組織させるのかに主題をおく。

具体的には、クチョスの家族集団の災厄に対する統一見解の調整に影響をあたえたキーパーソンたちの語りと、彼らと黒呪術師とされる第8夫人ニラの関係にテーマをおく。黒呪術事件の背後にある関係性の問題を明らかにし、いかなる力学が黒呪術を成立せしめるのかを明らかにしたい。

## 2. キーパーソンの発言と位置

第8夫人ニラが家族内で黒呪術師と認定される過程において、さまざまな推測・憶測が飛び交うようになるのだが、彼らの語りは無方向ではない。疑惑が発生するやいなや、加速度的にその証拠や証言を固めようとするのである。とはいえ、滞りなくコンセンサスが形成されるのではなく、その主体間の拮抗など、いくつかの軋轢が生じることになる。黒呪術師に対する語りは基本的に家族の成員どうして生成されるわけだが、そこには統一見解を誘導し調整する複数のキーパーソンが存在する。ここでは、まず「ニラが黒呪術師であり、家族に害意を持っている」という語りの発端になったレンゴの事例を紹介し、そして家族の統一見解を形成するのに影響力を持つ、長老のクチョス、第1夫人の次男サル、第7夫人ルミの3名のキーパーソンの位置と発言を確認しておくことにしよう。この3人が、ニラの擁護派と糾弾派の主導者だからである(といっても、擁護しているのはクチョスとニラの一人娘ウィルスだけだが)。

### 2-1. レンゴ

レンゴは第7夫人長女で、第8夫人ニラの黒呪術による最初の被害者とされている。本節では、まずはじめに1994年に起こった出来事と、そのあと弟のブルットが倒れたときに、彼女に起こった憑依現象を記したい。本項の記述はレンゴに対するインタビューの他、当時のレンゴを一番近くでみていた母のルミの談話も交えている。

1994年、レンゴが高校3年生の時の出来事だった。詳しい時期は覚えていない。彼女が被った災厄の最初は、腹痛から始まった。下痢や嘔吐の症状はなく、少々民俗医療の覚えがある義母(第6夫人)が腹部のマッサージをしてくれた。夜12時頃に痛みが増し、痛みによるものか、他の何かのせいなのかはわからないが、レンゴは泣き出した。彼女の声は大きく、近所に診療にきていた兄サルが家の前を通ったとき、その声を聞きつけて家を訪れた。サルが来る前に、呪術医である父クチョスが彼女の治療しようとした。しかし、レンゴ自身もなぜかわからないが、父の治療は受けたくなく、頑なに拒否した。サルが来たときには、レンゴは激痛のため白目をむいて気絶してしまっていた。サルは彼女の容態に危惧を感じ、速やかに治療を施した。薬水をつくって彼女に飲ませ、洗顔をさせたうえで、上半身に赤タマネギを使った吹きつけ治療をおこなった。その後、突然黒呪術師の霊が突然レンゴに憑依し、彼女はしゃべり始め、「誰々が私を病気にした」と第8夫人ニラを含む5人の女の名前を語った。それを聞いたクチョスは、翌朝、「自分の妻の中に家族に病をなし、害する者があるの

なら離婚だ」とニラを問いつめたが、彼女は「人を病気にしたりする黒呪術なんてできない」と言い張り、ついに本当のことを告白しなかったという。治療後、レンゴは再び泣き出し、それは2時間ほど続いた。そのうち泣き疲れ、朝夜明け近くまで黙り続けたが、眠ることはできなかった。翌日は非常に体が疲れていたが、意識ははっきりしており、再び悪霊に憑かれることもなかった。だが、彼女に悪霊に取り憑かれていたときの記憶はなかった。

約3ヶ月後、病気が再発した。学校の授業中、突然感情が高ぶり泣き出す。そして、その後すぐに倒れて気絶してしまった。友人達が看護し、家まで送ってくれた。家族はサルを呼び、レンゴは治療を受けた。この時はすぐに回復した。

さらに2ヶ月くらいあとのサラスワティの儀礼の日、バレ・バンジャール(balai banjar、地域の公共施設)に若者達が集まり、夜中の11時まで世間話を楽しんだり、騒いだりして楽しんでた。レンゴも同じように、その日は皆に交じって楽しんだ。だが家に帰ろうとして道を歩いていると、彼女は急に卒倒して意識を失った。ルミは、家の外の道が騒がしいことに気づいた。そしてレンゴの病気が再発したのを知ってとても心配した。しかしクチョスは、友人に担がれて泣きながら運ばれてくる娘を見て「道に捨てておけ」といった。ルミが考えるところでは、この頃クチョスは何度か娘の治療を試みたが効果はなく、彼にはすでにニラの黒呪術にうち勝つ力はなかったという。それどころか、レンゴはクチョスの治療を以前と変わらず拒否していた。本人にも理由はわからないが、とにかく父の治療を受けたくなかったという。しかし、サルが治療をすると、レンゴはすぐに回復していた。

高校を卒業してしばらく経つと(およそ5ヶ月後)、レンゴはある朝突然に無自覚に父に対して悪口雑言をはいた。それは、普段ならとても口に出していえるような種類の言葉ではなかった。クチョスは怒ってレンゴを蹴り、踏みつけにした。弟ブルットがその様子を見て父に立ち上がり、レンゴをかばった。なぜなら、レンゴは錯乱しており、もし、正気であれば、言うはずでない言葉だからである。暴力を使った父に対し、母ルミは落ち着くように取りはからった。弟は治療してもらうためにサルを呼びにいく。そして家で治療を受けたレンゴは、正気を取り戻した。

しばしば起こる娘の病気を心配した母は、娘を連れてP村の女性占い師トゥヌンのところにいった相談することにした。祖霊神が乗り移ったトゥヌンはこう教えてくれた。「病気を起こした人間はこれこれだ」とその特徴(女で、家族の一員で、年をとっている、太っている等)を述べた。こうして列挙された特徴にあてはまる女性はい人だけだった。ここで、この病気があらためてニラの仕業と知った。さらにトゥカンハは「ンマディ

(nemadi: 遠い祖先の霊で、ここではレンゴに生まれ変わった霊のこと)が、前世での約束を果たしていないので、呪いを受けやすい状態にある」と教えてくれた。その祖霊は供え物(baten suci)をつくり、プラ・ブタラ・グル(pura butara guru: 屋敷寺に祀られている祖霊神)に奉じることが約束したが、いまだにその約束が果たされていないのだという。その後、レンゴは、3日に一度3回続きで呪術医の治療を受けた。そしてレンゴはトゥヌンの指示通りに自分の誕生日にバビ・グリーン(豚の丸焼き)を供えた。それで約束が果たされ、以後、弟のブルットが黒呪術の攻撃に受けるまで、彼女が錯乱することはなかった。

2002 年3月3日の日曜日、ブルットがゴア・ラワ付近で倒れたと聞き、サル、ルミ、レイモンドの三人とともに、弟を迎えに行った。ブルットを車で家に届けるではとくに何事もなかったが、弟の治療に際して、突然無自覚に 15 分ほどしゃべりだしたのだという。サルが治療をして、彼女はすぐに正気に戻った。

レンゴはニラが黒呪術師であるという噂をすでに小学校の時にいろんな人から耳にしたが、その時は半信半疑という程度だったという。少なくともニラが妖しげな行為することは、屋敷ではみたことがなかった。しかし、この高校の時の事件があるまでは、普通の関係だった。とくに親しい関係ではなかったが、話しかけられたら答えるし、こちらから話しかけることもあった。またニラの娘ウィルスとも、関係は同様に普通だった。高校生の時の事件を境に、レンゴと、ニラとウィルスの親娘との間に会話はなくなり、ニラたちもまたレンゴに話しかけることはなくなった。

ここで注意すべきは、家族にとって黒呪術という非日常的事件がレンゴに半年以上にわたって起こっているにもかかわらず、問題がルミとレンゴ、そしてサルまでにとどまっていることである。もちろん他の家族もこの件は知ってはいたが、問題が家族全体に波及するということとはなかった。しかし、レンゴにふりかかった出来事は、のちの黒呪術事件の根になっていることは間違いがないだろう。

そしておよそ8年の時を経て再び黒呪術の災禍が家族の一部を襲ったとき、家族に恐慌が走ったのである。これは、のちに考察することにする。

## 2-2. クチョスの事件に対する見解

ここから、事件に対するキーパーソンの見解を記していこう。まず、家長のクチョスについてふれる。彼は家族の長老であり、州都のデンパサールにも名が知られている呪術医である彼は、ニラと同居しており(ルミも同じ敷地内に居住しているが、家屋

は別になっている)、家族の中で唯一のニラの庇護者でもある。強力な呪術で高名を得たクチョスであるが、ニラを庇う態度ゆえに、一族の者から「第8夫人に操られ、子供のようになって」しまい、その呪力も衰えたと考えられている。第7夫人の子供たちが病に倒れたときには、子供(ワティ、レンゴ)からの治療拒否や、サルから家族への治療行為を止められたりもしている。しかし、表だって他の家族がニラを非難できないのは、クチョスの力が幾分残っていることを示している。では、クチョスは家族の身に降りかかった病や事故をどのように捉えているのだろうか。

彼もまた黒呪術の被害者を診断し、家族の病気の原因を黒呪術と結論づけている。彼自身、黒呪術に対するエキスパートであることから、黒呪術を用いたのが誰であるのかを脈診から特定することができるという。しかし、この方法は家族内の患者に対してはとくに不安定で、犯人を知ることができない場合が多い。ワティが憑依したときの発言に関しても何度も耳にしているが、おもに神上がり儀礼に関する先祖の話題だったということだった。つまりクチョスは、数々の災厄の原因が黒呪術にあることを認識しているが、ニラのことには触れなかったのである。他の家族に尋ねたところ、彼はワティがニラについて話しているところに何度も居合わせていたともいう。部外者の筆者が聞き手であるという条件はあるが、いずれにせよ彼の表向きの意見は、黒呪術は家族外の人間の仕業であり、家族に対しても同様の見方を示している。そして原因が誰であるかを明らかにしないまま、その対策として、神上がり儀礼が必須であると説くのである。というのは、先祖に対する儀礼に関して、この家族は神上がり儀礼をおこなったことがなく、死後 12 日後におこなう簡素な葬送儀礼をおこなっていただけだからである。これまで神上がり儀礼が未遂行だったにも関わらず、今までは特に問題もなく平穏だったのは、単なる僥倖にすぎず、「最近になって我々の家族に敵が現れ、病人が続出し、ワティが憑依して祖霊の現況を告げたことで問題になった」のである。これまでクチョスの家族は、費用の問題で神上がり儀礼をすることができなかった。今は家族も増えて費用を分担できるようになったので、儀礼の遂行が可能になったという。彼の考えでは、「もし、儀礼がなされれば、祖霊は浄められ、我々家族を守るようになり、呪いによる病気はなくなる」とのことであった。

この家族集団に神上がり儀礼の経験がないのは、経済問題もさることながら、前述したように自分たちの起源集団を特定できず、パセック・ゲルゲルとプラサリという2つの候補をもっていたためである。しかし、ルミがトゥヌンのもとを訪れたことにより、パセック・ゲルゲルが唯一の起源集団として認定された。彼は、神上がり儀礼を行えば、祖霊の零落は回復されて家族を守護し、黒呪術による被害はなくなるというが、

この点に関しては他の家族も同一の認識を持つようになった。

### 2-3 . サルの事件に対する見解と行動

次に第1夫人の次男サルの考えに耳を傾けてみたい。彼は小学校の教員であり、かつ呪術医でもある。ただし、呪術は父のクチョスから教えを受けておらず、本による独習で修業をした。キャリアはほぼ10年で、近在の村人を専門に活動しており、父のような名声こそは得ていないが、家族で病に倒れた者は、多かれ少なかれ彼の治療を受けている。発言力が強く、家族の意見のまとめ役である。

彼は、異母妹ワティが病を患ったとき、一族でブサキ寺院で浄化儀礼をするという計画を立てた。彼の説明では、ブサキ寺院で聖水を受ければ、普通の善良な人間であれば浄められるだけだが、仮に黒呪術師が聖水を受けると病に陥るのだという。このように自らを浄め、疑惑を晴らすには最適な儀礼であるにも関わらず、ニラだけはサルの計画に反対した。計画自体は家族会議によって決められたもので、そこには彼女に対するテストの意味が込められていた。その会議には、クチョスも参加しており、「誰が嫌がる？大丈夫に決まっている。もちろんニラにも儀礼を受けさせる」と同意したのだ。そこでサルはニラを浄化儀礼に誘ったと同時に、家族に黒呪術を使ったかどうかを問いつめたのである。最初のうち彼女は否定していたが、徐々に馬脚を現したという。「ひょっとしたら両親からもらったお守りが勝手にやっているのかもしれない」と、少しだけ疑惑を認めだしたのだ。そこでサルは、得たりとばかりに「おお、それなら好都合じゃないか。ブサキの儀礼に出れば、きっとお守りの効力だけが消え去り、あなたは浄められる」と誘ったのだ<sup>1</sup>。

しかし、それでも彼女は浄化儀礼の誘いを断り続け、結局、サルの申し出を受けなかった。この事実は、彼女が黒呪術師であるという確証として、家族にとって十分すぎるほどの説得力があった。その擁護者であるクチョスは、必然的に家族内における権威と発言権をおおきく損なうことになった。一方で、家族の多くがニラの黒呪術の恐怖に脅えるなか、彼女に対して正面から糾弾できる人物は一人サルだけであった。家族の大部分はサルを支持し、彼の意見に重きをおいた。

黒呪術事件以後、第1章の表1- で示したとおり、夫であるクチョスと第8夫人長女のウィルスを除いて、ニラとその他の家族との関係は悪化した。しかし、「事件」以前においては、黒呪術師の噂があったにしろ、ニラは排除・無視されることもなく、家族の一員として遇されていた。ただ、彼女と対立関係にあった者たちもいた。それが、第1夫人次男のサルと第7夫人ルミである。ルミの家族とサルとの関係は以前から良好

で、「事件」が発生してからは、ニラと同じ敷地内に住むルミの家族を家に引き取るなど、様々な便宜を図っている。

サルとニラの確執は、じつは父クチョスとニラの結婚以前からあった。結婚前のニラは仕事を持っていなかったが、クチョスがデンパサールのコネクションを使って、学校用の務員として職を得ることができたのだという。そのため、クチョスは多大な金額を出費した。このような苦労を払ってニラに職を与えたにもかかわらず、彼女は当初クチョスとの結婚を拒んだ。そこでクチョスは、サルの名義でバイクを買い与えたりして、その歡心を買おうとした。また、彼女の家族に結婚を申し込んだが受け入れられなかったため、クチョスは駆け落ち婚(ngorod)を試みた<sup>2</sup>。車を使って彼女をさらい、他の村に逃げ込んだ。その時、彼女は泣いて嫌がったが、クチョスは呪術を用いて彼女を落ち着かせ、結婚を承諾させたという<sup>3</sup>。

結婚後、クチョスが前述のバイクを再びサルに与えたところ、ニラは「なぜサルがわたしのバイクにのっているの？」と怒りを表明した。また当時、サルはクチョスから「金貨」を4枚預かっていたが、それを聞きつけたニラはクチョスに頼んでサルに「金貨」を家に持ってこさせるようにいった。後日、サルがクチョスの家を訪ねてみると、「金貨」は指輪に変わってニラの指におさまっていた。サルはニラについてのエピソードをほかにも数多く語ってくれたが、その主旨は、ニラがいかに強欲であるか、ということを強調するものばかりだった。

これらの経緯からすれば、サルがニラに対して以前から不満を持っていたとしても不思議はない。サルが語ってくれたことによると、父クチョスとニラの結婚の過程で彼はほかにも苦汁を飲まされ、結婚後も自分が所有している(と考えていた)バイクと、家族の共有財産と考えていた金貨を奪われたという。彼女に対する最初の印象が良くなかったうえ、その後の経済もしくは財産の問題でも苦々しく感じていたのである。

## 2-3. 第7夫人ルミの事件に対する見解と行動

では、この事件をめぐって明らかになったルミとニラの関係はどうだったのだろうか。

クチョスとニラの結婚後、最初の約1ヶ月間、ルミは普通にニラと話をしていた。しかしニラは、他の妻たちを怒らせるようなことをしたのだという。彼女は夫クチョスにさまざまな陰口を吹き込み、悪感情を起させようとした。なぜか、ニラは他の妻をこの家から追い出そうとした。ルミはそう推測する。ニラは当時、中学校で用務員として働いており、自分自身の収入もあった。そこでニラはクチョスに、「私は夫に何かを求めたことはないが、ルミは仕事も何もせず、生活費を求めるだけの存在だ。私なら仮にお



金がなくても隣人から借りるなどして、夫に迷惑をかけたりしない」と話していたことをルミは知った。それを聞いて、ルミは非常に傷つけられたという。そこでルミは仕事を探すことにしたが、クチョスはそれを聞くと怒って彼女が仕事をするのを止めた。彼女はその原因を、夫の嫉妬によるものだと考えている。どのような職場でも男性がいるので、クチョスはそれを嫌がったのだとルミはいう。そして、「どうしても仕事がしたいなら、この家を出てその仕事場で暮らせ」とクチョスはいい放った。ルミは仕方なく仕事を断念したが、時にクチョスは数ヶ月に渡って生活費を与えないこともあった。しかも来診の患者たちの治療費やお礼の品物は、すべてニラが受け取っていた。ルミは、夫は自分に対しては亭主関白であるが、ニラに対しては恐妻家になっており、ニラに遠慮をして自分には生活費を渡せなかったのだと考えている<sup>4</sup>。

そういう状態がずっと続いており、レンゴが錯乱した「屋敷寺のお供え」の件とともに数ヶ月間もらっていない生活費のことを訴えると、クチョスは怒り狂った。そこでレンゴはクチョスに対して暴言を吐いたのだ。しかし、前述したようにクチョスは暴力を振った。彼は娘を足蹴にし、引き倒して踏みつけにした。息子のブルットが止めようとしたが、クチョスの剣幕を恐れて親戚の家に助けを求めにいった。おそらく母や姉が父に怒りを受けるところを見たくなかったのだと、ルミは考えた。そして頼りにしているサルにきてもらったのだった。

ルミは、夫はすでにその時からニラの黒呪術によって、操られていたのだと考えている。レンゴにおこったこともすべては彼女の黒呪術が原因であると確信していた。夫はいまや幼児のようであり、ニラのいうことならなんでも聞くようになったという。クチョスがニラに「座れ」といわれたら、そのままなんの疑いもなく座るだろう。このようにルミは家庭の問題に関して、クチョスには責任がなく、すべてニラの黒呪術によって引き起こされたものだと考えている。

### 3. 考察 ・黒呪術をめぐる個と共同性-

以上から、ルミもサルも、ニラの結婚当初から彼女との確執があったことがわかる。しかし、彼女の庇護者である長老クチョスに対しては、両者とも同情的で、「クチョスはニラに操られている」という成員たちの見方によって非難の矛先は向けられていない。ところが、ニラとの確執は、黒呪術師という要素を外して考えてみると、実際には財産分与や家計の分配といった経済的側面と夫婦間の関係性の問題であることがわかる。一般にバリにおける黒呪術は同じ屋敷の中の家族の間で最も頻繁に用いられると信

じられており、また、多くは財産の相続をめぐるいざこざに結びついているといわれる[吉田 1983:140]。同様にロブリックは、黒呪術の使用される範囲はおもに家族内か近隣の人間であり、カーストや地位をまたいで使用されることは稀だとしている[Lovric 1986:88]。つまり、クチョスの富と愛情の不平等さに対する不平の裏返しとして、ニラに非難の矛先が向けられたといえるかもしれない。

クチョスの家族のように緊密性の高い「正真性の水準」をもつ集団<sup>5</sup>では、個人間に直接的で深い感情的関係が構築される。しかし、一方で彼らは、可視的世界と異なる位相に位置する世界観から構築される想像的关系を持つ<sup>6</sup>。前章でもみたように、この二つの関係がバリにおいては密接不可分であることから、経済や人間関係といった現実によって構築される悪しき感情的関係が、想像的关系へと転換した結果立ち現れるのがこれが黒呪術師とはいえまいか。このことは、もちろんサルやルミの「事件」だけに限らず、他の成員の場合にもいえるだろう。

「事件」以前からニラとルミ達の間には緊張関係があったが、とくに他の成員に問題が波及することなく、均衡が保たれていた。しかしながら、「事件」を境にその均衡は破綻し、サルの主導によって他の成員たちはルミ側で結束した。ここにおいても、個人間の問題が集団の問題へと転位している様子がわかる。注意すべき点は、集団内には、黒呪術や祖霊祭祀とは異なる位相での社会的コンテクストが働いているということにある。

そして、ニラが排除されていく過程で、長老クチョスも彼女に引きずられるように家長としての権威が低下し、その家長としての役割は剥奪されて、サルに委譲されることになった。事実、サルはこの一連の事件以来、家族会議においても、召集や司会・進行を行う議長の役割を担うようになり、儀礼の取り仕切りも行うようになった<sup>7</sup>。すなわち、家族内の位置関係に変化が生じたのである。その際、サルとルミは、第1章で示したようなニラに対する集団的な情動を画一化する重要な起点となったのである。もちろんこの過程において、ワティに憑依が起こるまでの間は、家族内で「黒呪術」の解釈をめぐる逡巡があり、「黒呪術」という共同性の成立が時間的に重なり合う時期もあった。しかしワティが憑依を経験した後、ニラに対する解釈は家族内で定まるようになったのである。

このような妖術をめぐる個と共同性の関係について、小田亮は「ウィッチクラフトの特徴は、立場による解釈の相違が顕在化することにあるといえるかもしれない。嫌疑のレベルにしる告発のレベルにしる、『この災いは誰その妖術のせいだ』という言説は、語る主体の立場(人称性)と強く結びついており、権力関係によって相対化されて

いる。このように主体の個別的立場に縛られた解釈は、……立場を括弧に入れて共同利害とするのにより強い力が必要となる」[小田 1986:174]と指摘している。本事例に鑑みると、これまでヴァラエティに富んでいた災厄や人間関係の個別的な内容は、「黒呪術」の名のもとに集団的問題に回収され、きわめて政治性を帯びた家族内の力学によって、統一見解が形成され、その権力関係が再編成されたということになる。くわえて、本事例において「共同利害とするのにより強い力」の契機となったのは、同時期に災厄が多発したという偶然性ではないだろうか。1994 年にレンゴが錯乱し病に倒れたとき、災因はニラの黒呪術師であるという言説があらわれたのにも関わらず、問題は集団化しなかった。これは、短期間における災厄の多発という機会が、見解の集団化に大きく働いていることの証左となりえるだろう。

以上から、3つのことをまとめておこう。ひとつは、黒呪術事件の背後には、家族成員間の経済的偏差などの現実的なコンテクストが存在し、それらが黒呪術事件の下地を形成する要因となっていることである。そして、キーパーソンにとっての有意的な行動が当事者を含む集団に対して結束を固め、と同時に家族集団の対処法を方向づける役割を担い、集団の対処法に影響しているということである。さらに災厄が集団の問題として進級するには、災厄が短期間に多発するというある偶発性が引き金になっているということである。

#### 4. おわりに

本章では、黒呪術の物語の背後にある関係性の問題に着目し、そこに経済的偏差や愛情分配の不平等の存在、「他者」を創り出す災厄の多発性と偶然性のメカニズムを提示した。これらを得て、人々はそれまで抑制していた感情を顕わにし、「黒呪術師」を排除する方向で災厄に対処していったのである。しかし、排除を抑止する要素があらわれる。祖霊祭祀である。

そこで、次章からは黒呪術師としてニラを排除させない「祖霊祭祀」にまつわるコンテクストと、集団の意志決定のポイントになる憑依の語りについて考察したい。次章では、まず外部の権威であったトゥカン・トゥヌンという占い師と人々の対話についてみていこう。

---

<sup>1</sup> 彼らの言によると、第2章でみたとおり、呪物は意志をもっていると考えている。

<sup>2</sup> 一般的に「駆け落ち婚」といっても、結婚の既成事実をつくるために友人の家などに

---

かくまわれるだけの場合が多い。しかし、クチョスと第8夫人ニラの場合はそのように芝居がかったものではなかったという。バリの婚姻形式については、詳しくは永淵[1990]を参照のこと。

<sup>3</sup> このように異性に対して恋慕の情を起こさせる呪術をグナグナ(guna-guna)といい、クチョスは自他共に認めるこの呪術の名人であるという。

<sup>4</sup> 中谷文美によると、バリの女性にとって、家事や育児にまつわる行為は必ずしも「女の仕事」とはみなされない。むしろ「女の仕事」とみなされる領域は、儀礼に関わる供物の製作であったり、その他の手工業・小売商などの経済的活動になる[中谷 2003]。「仕事」をすることも許されず、夫から生活費も与えられない状況は、ルミにとって屈辱的だったと思われる。

<sup>5</sup> ここでは、人間関係のマトリクスの動態を分析するために、レヴィ=ストロースの「正真性の水準」[レヴィ=ストロース 1972:407]を持つネットワークを想定している。ここでいう「正真」とは本質主義的な意味を表しているのではなく、現代都市のような「間接のコミュニケーションの形(本、写真、新聞、放送、その他)」[Ibid:408]によって結ばれる大規模社会と対比して、人々がお互いを知っており「個人の間の、具体的関係と豊かさによって測られる」[Ibid:411]ことを基盤にしている社会である。これに関連して、バーガーとルックマンは、社会的相互作用の原型としての「対面的状況」を設定し、「他者はわれわれ双方によって共有されている生々しい現前性の中で、私にあらわれている。……私の<ここといま>と相互にたえず浸透し合うことになる。その結果、ここには私の意志表出と彼の意志表出との間に持続的な相互交換がみられるようになる」としている[バーガー & ルックマン 1977:48]。

<sup>6</sup> 「感情的関係」と「想像的關係」という用語は、今村仁司[1989]から借用している。

<sup>7</sup> 興味深いのは、第7夫人の次女ワティとサルスの長女ジェロスリが憑依を経験し、第8夫人を糾弾している点である。ワティはこの後結婚して家を出るが、ジェロスリは父サルとともに家族の儀礼を取り仕切るようになる。ここにも世代交代の萌芽と継承がみられる。